

『荒涼館』における慈善

Charity / Philanthropy in *Bleak House*¹

田村 真奈美

Manami TAMURA

ディケンズと慈善というのはとくに目新しいテーマではない。すでに1978年にはノリス・ポープ (Norris Pope) による研究書『ディケンズと慈善』 (*Dickens and Charity*) が出版されているが、これはディケンズの慈善に対する基本的な姿勢と実際の活動への関わりを、その宗教的側面にも目配りをしつつ明らかにしたもので、現在読んでも示唆に富む資料である。一方で、18世紀から19世紀の英国における慈善は、歴史・文化研究において現在盛んに取り上げられているテーマの一つである。とりわけ、慈善活動がミドルクラスの女性たちにとってほぼ閉ざされていた社会活動に参加できる数少ない機会を提供し、女性の公共圏への参入を可能にしたという点が注目されている。これら慈善の研究においてしばしば見られるのがディケンズの『荒涼館』への言及である。『荒涼館』は英国の司法制度批判を中心に据えた作品ではあるが、慈善もまたこの作品の大きなテーマの一つであることは確かである。本稿では、近年の慈善の研究を踏まえて『荒涼館』を読み直し、もう一度ディケンズと慈善について考えてみたい。

I. 近年の慈善研究における『荒涼館』への言及

文学・文化研究の立場から19世紀英国の女性による慈善活動を扱ったドリズ・ウィリアムズ・エリオット (Dorice Williams Elliott) の『家庭の外の天使』 (*The Angel out of the House*, 2002) の序文には次のような一節がある。

The figure of the philanthropic woman had long evoked such contradictory perceptions. Perhaps the most famous parodies of the strong-minded woman philanthropist were the “telescopic philanthropist,” Mrs. Jellyby, and

the “cast-iron Lady Bountiful,” Mrs. Pardiggle, in Charles Dickens’s *Bleak House*. (2)

19世紀の英国では女性の慈善活動についてさまざまな意見があったが、女性慈善家のパロディとして最も良く知られていたのが『荒涼館』のジェリビー夫人とパーディグル夫人だった、というのである。さらにエリオットは、女性の慈善活動として盛んに行われていた貧民慰問について、小説における「理想的な」(exemplary)実践者がギヤスケル(Elizabeth Gaskell)の『北と南』(*North and South*; 1854–55)のヒロイン、マーガレット・ヘイル(Margaret Hale)ならば、「悪い、あるいは危険な」(“bad” or “dangerous”)慰問者はパーディグル夫人だ、とも述べている(242)。

歴史学者の慈善研究のなかにも『荒涼館』への言及がある。F・K・プロハスカ(Prochaska)による『19世紀イングランドにおける女性と慈善』(*Women and Philanthropy in Nineteenth-Century England*, 1980)は19世紀英国における女性の慈善活動を膨大な一次資料に基づき詳細に跡づけた研究書だが、貧民慰問を扱った第4章にパーディグル夫人の名前が挙がっている。そこでは、19世紀の貧民慰問はしばしば諷刺の対象とされたため、慰問者といえばつい戯画化された人物を思い出しがちで、またその役割も軽視しがちである、と述べられているが、慰問者がそのように見られてしまう一因が、パーディグル夫人のような良く知られた小説の登場人物のためなのだという(117–18)。

こうしてみると、『荒涼館』は女性慈善家のイメージを悪くした小説とでも言うようだが、果たしてそうなのだろうか。実際には、盛んに批判されているジェリビー夫人とパーディグル夫人の二人だけがこの小説に出てくる慈善家ではない。『荒涼館』には男性の慈善家も登場し、また「慈善家」とは言えなくとも慈善的行為をする人物は複数描かれている。『荒涼館』は「慈善」をめぐる作品とも言えるほどである。まずは批判されるべき「悪い」慈善家から見てゆく。

II. 「悪い」慈善家

初めにジェリビー夫人だが、彼女は慈善活動に熱中するあまり家庭を顧みない女性として描かれる。彼女の目はいつもどこか遠くを見ていて、すぐ身の回りのことが見えていない。ジェリビー夫人が目下夢中になっているのは、アフリカへ移民を送り、コーヒー栽培と現地人の教育に従事させるというプロジェクトであるが、彼女の主な活動は会議への出席と手紙のやりとりであり、とく

に手紙書きはそれ自体が目的になってしまっているかのよう強調して描かれている。

このジェリビー夫人のモデルとしてしばしば名前があがるのがキャロライン・チザム (Caroline Chisholm; 1808-77) である。³ チザムはオーストラリアへの移民を助ける活動を行ったことで知られ、「移民の友」(emigrant's friend) と呼ばれた。ディケンズは、貧しい人々がオーストラリアへ移住するのを経済的に援助するために彼女が設立した団体「家族移住貸付け協会」(Family Colonisation Loan Society) に寄付を送り、『ハウスホールド・ワーズ』にこの団体を紹介する記事を書き載せるなど、⁴ その活動を支援している。つまり、チザムは「悪い」慈善家というわけではなく、あまり実のある活動をしていないように見えるジェリビー夫人とは違って、その活動は確実に成果を残した。しかし、チザムには、家庭での義務を十分果たしていないというジェリビー夫人との共通点があったようである。友人の慈善家アンジェラ・バーデット＝クーツ (Angela Burdett-Coutts; 1814-1906) に宛てた 1850 年 3 月 4 日付けの手紙で、ディケンズはわざわざその点に言及している。

I dream of Mrs. Chisholm, and her housekeeping. The dirty faces of her children are my continual companions. (*Letters* 6:52)

このようにジェリビー夫人については、その活動が現実離れしていることのみならず、家庭を蔑ろにしていることが大きな問題なのだが、その二つは実は別個の問題ではない。ジェリビー夫人の印象をジャーナリストに聞かれたエスタはこう答えている。

‘We thought that, perhaps,’ said I, hesitating, ‘it is right to begin with the obligations of home, sir; and that, perhaps, while those are overlooked and neglected, no other duties can possibly be substituted for them.’ (63-64)

「まず家庭での義務から果たすべき」というエスタのことばは“Charity begins at home”という諺を思い起こさせるが、この諺において“home”は「身近なところ」というほどの意味である。つまりエスタのことばは、そこから当然想起される諺の意味をも重ねあわせれば、遠いアフリカでの慈善活動に夢中で家庭を顧みないだけでなく、国内でも身近なところに援助を必要とする人がいるのに気づいていないジェリビー夫人に対する二重の批判になっているのである。

ディケンズ自身、海外での慈善活動には批判的で、まず国内を優先すべきだ (The work at home must be completed thoroughly, or there is no hope abroad) と雑誌『エグザミナー』(*The Examiner*) 1848 年 8 月 19 日号に寄稿している。⁵ これ

は、英国人がアフリカへ移住して現地の人々を雇って農業を行うことで、現地の人々が奴隷として売られないよう経済的に自立させるという「ニジェール遠征」(Niger Expedition) と呼ばれたプロジェクトが失敗したことについてのコメントである。ジェリビー夫人のアフリカ支援プロジェクトがこのニジェール遠征を連想させることも考えると、⁶ ジェリビー夫人が非難されるのは身近な家庭／国内 (home) に目を向けようとしていないためであることがいっそうはっきりする。さらに、道路清掃の少年ジョーが座って朝食のパンをかじっていたのが福音伝播協会 (Society of the Propagation of the Gospel in Foreign Parts) の建物の入り口だった、という皮肉な場面にも (221)、海外宣教よりもまず国内で異教徒のような生活を送っている貧民を助けるのが先ではないか、という意識が強く感じられる。

ジェリビー夫人と並ぶ悪名高き慈善家パーディグル夫人は、身近なところ、恐らく自分の住む教区内で活動をしているが、それでも彼女の活動は多岐にわたっている ('I am a School lady, I am a Visiting lady, I am a Reading lady, I am a Distributing lady; I am on the local Linen Box Committee, and many general Committees'; 102)。この活動的で疲れを知らぬ女性は、“a woman of business” を自認しているが (103)、エスタによれば、慰問の際のパーディグル夫人の態度は実際「あまりにビジネス・ライクで規則的」(much too business-like and systematic) である (106)。彼女の最大の問題は、ドリス・エリオットも指摘するように、貧者に直に接しているだけに階級間の問題をこじれさせる可能性が高いことである (4-5)。彼女が訪問した煉瓦職人の一家は誰もその訪問を歓迎せず、とくに一家の主人はパーディグル夫人に対する敵意をあからさまにしている。ミドル・クラスの女性による慰問は、そもそも貧民階級に援助の手を差し伸べて階級間の橋渡しをするものだったはずなのだが、やり方によっては貧民階級の間を上階級に対する反感を生むだけになり、かえって害になるのである。

パーディグル夫人のように慈善活動によってかえって弊害をもたらす女性に対する批判は、当時しばしば見られた。慈善活動、とくに貧民慰問は一種のブームになり、誰もが簡単に手がけられたこともあって、女性の慰問者が増えれば増えるほど安易な慈善活動の問題点を指摘する声も増えた。そして、とくに女性が批判されるのには理由があった。次にあげるのは J・S・ミル (Mill; 1806-73) が 1861 年に書いた『女性の隷従』(The Subjection of Woman; 1869) からの引用である。

As for charity, it is a matter in which the immediate effect on the persons directly concerned, and the ultimate consequence to the general good, are

apt to be at complete war with one another: while the education given to women—an education of the sentiments rather than of the understanding—and the habit inculcated by their whole life, of looking to immediate effects on persons, and not to remote effects on classes of persons—make them both unable to see, and unwilling to admit, the ultimate evil tendency of any form of charity or philanthropy which commends itself to their sympathetic feelings. The great and continually increasing mass of unenlightened and short-sighted benevolence, which, taking the care of people's lives out of their own hands, and relieving them from the disagreeable consequences of their own acts, saps the very foundations of the self-respect, self-help, and self-control which are the essential conditions both of individual prosperity and of social virtue—this waste of resources and of benevolent feelings in doing harm instead of good, is immensely swelled by women's contributions, and stimulated by their influence. (567)

この引用の前の部分でミルは、女性が公共のモラルに関わるところで影響力を持つようになってきているが、その影響力は有益 (useful) であるばかりではなく、しばしば有害 (mischievous) である、と述べる (566)。そしてその原因が、女性の受ける教育と育った環境にある、というのである。理解よりは情操を重んじる教育を受け、身近なところのみを見るようにしつけられたために、多くの女性たちの慈善は「行き当たりばったりで近視眼的な善行」(unenlightened and short-sighted benevolence) である、とミルは分析する。

ミルの見解は、安易に金や物を渡すだけの慈善は貧者の自立の助けとはならない、という功利主義的な立場からのものだが、それとは全く違う立場から慈善活動に携わる女性に対する教育の必要性を訴えた人物にアナ・ジェイムソン (Anna Jameson; 1794–1860) がいる。ジェイムソンは 1825 年に出版された虚構の旅行記『退屈した女の日記』(*The Diary of an Ennuyée*) で一躍有名になった作家だが、いわゆる「女性の問題」(woman question) にも深い関心を寄せ、独身女性が慈善を仕事にできないかと奮闘したことで知られている。その彼女の講演に基づく著書『カトリック及びプロテスタントの慈善婦人会, 他』(*Sisters of Charity, Catholic and Protestant, and the Communion of Labor*; 1857) においても、当時のミドル・クラスの女性が一般的に受けていた教育は慈善活動の現場では役に立たないことが指摘される。そのうえで彼女は、キリスト教社会主義者の F・D・モーリス (Maurice; 1805–72) らが中心となって、「支援や教育を手がける前に何を学ばばいいのか知りたい女性の聴衆, 教育を受けた女性たちに向けて」(to a female audience, to educated women, who wished to know what it was

best for them to learn before they were fitted to help and to teach) 行った講演会について紹介する。

[W]hat was surprising, and delightful too, there were found ready and willing to deliver these lectures to ladies “on practical subjects,” eleven distinguished professional men; of these, six were clergymen, three physicians, and two lawyers. The six lectures delivered by clergymen dwelt of course chiefly on the duty of well directed benevolence, in the hospital and in the workhouse, in parish supervision, and district visiting: all excellent in spirit and feeling [. . .]. The three lectures by the medical men are all so excellent [. . .]. The two lectures on law, (“Law as it affects the Poor,” and “Sanitary Law,”) are useful and clear, though technical. (271–73)

そして、このように女性が慈善活動に必要な心構えや知識を、聖職者や医者、弁護士などといった専門職の男性から教わる機会をもっと作ろう、と呼びかけるのである。

女性による安易な慈善活動には問題があるという意識はかなり社会的に共有されていた。貧民慰問のためのマニュアルが複数出版されていたという事実 (Elliott 140–42) も、多くの女性が何の準備もないまま慈善活動を始めざるを得なかった状況を裏付けている。ディケンズは触れていないが、女性の慈善活動がもたらす弊害には、彼女らの教育の問題も関わっていたのである。

しかしながら、『荒涼館』に描かれる「悪い」慈善家は女性だけに限らない。自称「慈善家」(philanthropist) のクウェイルのミッションは、他の慈善家のミッションに夢中になることだと説明されるが (203)、実際、彼にとっての慈善活動は、それに関心を示すことで他人に取り入って生きていこうとする処世の手段に過ぎない。また、福音派非国教の説教師のパロディと思われる自称聖職者のチャドバンドは、神の存在も聖書も知らないジョーに滔々と説教を垂れるが (357–61)、相手の事情を考えずに紋切り型のことを繰り返すだけの彼の説教は全くジョーに届くことはなかった。

III. 理想的な慈善家

以上見てきた「悪い」慈善家に対して、『荒涼館』にはもちろん「良い」慈善家、理想的な慈善家も描かれている。彼らに共通する特徴は、決して自ら「慈善家」などと名乗らないこと、声高にミッションを主張することなく黙々と自分が良いと信ずることをする、という点である。ここでは理想的な慈善家の代表として、ジャンダイス、アラン・ウッドコート、そしてエスタを見てゆく。

ジャンダイスは、エスタが育ての親であった叔母の死後一人残されたのを知って、寄宿学校へ送り、ガヴァネスとして自立できるよう教育を受けさせた。そして期待通りの教養を身につけた彼女をエイダのコンパニオンとして雇ったのである。改めて感謝されると照れてどこかへ消えてしまうジャンダイスは、声高にミッションを主張する慈善家たちの対極にいる人物として描かれる。

裕福なジャンダイスのもとには、慈善家たちからの寄付の依頼が殺到する。荒涼館にいるときには郵便で、ロンドンにいるときには慈善家たちが直接押し掛けてくる。これはディケンズの実体験に基づいているようである。1858年、ディケンズはエドモンド・イエイツ (Edmund Yates; 1831–94) に宛てて次のように書いている。

For a good many years I have suffered a great deal from charities, but never anything like what I suffer now. The amount of correspondence they inflict upon me is really incredible. But this is nothing. Benevolent men get behind the piers of the gates, lying in wait for my going out; and when I peep shrinkingly from my study-windows, I see their pot-bellied shadows projected on the gravel. Benevolent bullies drive up in hansom cabs [. . .] and stay long at the door. Benevolent area-sneaks get lost in the kitchens and are found to impede the circulation of the knife-cleaning machine. (*Letters* 8:553)

この手紙はポウブも引用しているが、慈善家たちが殺到したのはディケンズが著名人だからというだけではなく、その作品から同情や善意といった感情と結びつけられることが多かったためだと説明している (10)。実際、ディケンズは多くの慈善事業に積極的に関わり、いろいろな方面に寄付をしていた。

In 1846–7, for example, he planned and launched Urania Cottage, Miss Coutts's reformatory for women, which he has mainly responsible for overseeing until 1858. Through speeches, charitable readings, and subscriptions, he gave support to thirteen separate hospitals and sanatoriums. His banking records show that he made at least forty-three donations to benevolent and provident funds. He was willing to be listed as an officer of such diverse voluntary bodies as the Metropolitan Drapers' Association, the Poor Man's Guardian Society, the Birmingham and Midland Institute, the Metropolitan Sanitary Association, the Orphan Working School, the Metropolitan Improvement Association, the Royal Hospital for Incurables, the Hospital for Sick Children, and even the Newsvendors' Provident and Benevolent Institution. (Pope 10)

また、個人的にも亡くなった友人の家族のために力を尽くすなど、彼自身がか

なり慈愛の精神に富む (charitable) 人物だった。エスタいわく、良い目的のためには協力を惜しまない、心優しいジャーナイス (204) も、自然と慈善家を引きつけてしまったのだろう。ただし、ディケンズの場合とは違って、彼の寄付が実を結んだ例は作品中には見当たらない。彼の慈善行為の唯一の成功例は「孤児」エスタを立派に育てたことなのである。

アラン・ウッドコートもまた、理想的な慈善家として描かれている。彼は医者 (surgeon) だが、経済的に恵まれず、一時は海軍船医となって英国を離れなければならなかった。経済的に恵まれない理由の一つは、彼が良心的で、貧しい患者でも親身に世話するためであった。死期が近いジョーをジョージ氏のもとに置いてもらうための費用を負担したのも、自称聖職者のチャドバンドには救えなかったジョーの魂を救ったのもウッドコートだった。死の床でジョーは、ウッドコートの言う通りに繰り返すことで、初めて祈りのことばを口にしたのである。富や名声を追うことなく、助けを必要とする人々に黙々と尽くすウッドコートをジャーナイスは高く評価していた。そして、船医の仕事を務めあげた後英国内で仕事を探すウッドコートに、ヨークシャーでの仕事を紹介したのであった。

もう一人の理想的な慈善家エスタは、前述したように、自分自身がジャーナイスの善意によって『荒涼館』に迎えられたのだが、その彼女が今度は周囲に善意のお返しをする。パーディグル夫人の貧民慰問に無理やり付き合わされたことが縁で、赤ん坊を亡くしたばかりの貧しい煉瓦職人の妻ジェニーと知り合ったエスタは、パーディグル夫人にはない細やかな心遣いでジェニーを慰める。天然痘に罹ったジョーを初めに看病しようとしたのもエスタだった (ただし、この看病はハロルド・スキムポールの横やりで失敗してしまう)。さらに、親を亡くしたチャーリーをそばにおき、勉強を教えながら女中として訓練した。エスタはただ親切なだけではない。ガヴァネスになるための教育を受けた彼女は、自分では認めないもののかかなり鋭い洞察力の持主で、見せかけだけの、あるいは自己満足にすぎない慈善を見破り、的確に批判している。次にあげるのは、パーディグル夫人の貧民訪問に同行した際のエスタの感想である。

Ada and I were very uncomfortable. We both felt intrusive and out of place; and we both thought that Mrs. Pardiggle would have got on infinitely better, if she had not had such a mechanical way of taking possession of people. The children sulked and stared; the family took no notice of us whatever, except when the young man made the dog bark: which he usually did when Mrs. Pardiggle was most emphatic. We both felt painfully sensible that between us and these people there was *an iron barrier*, which could not be removed by

our new friend. (107-08; 強調引用者)

パーディグル夫人には越えることができなかった「鉄の障壁」(iron barrier)を後に彼女が越えることができたのも、パーディグル夫人の失敗の原因を正しく見極めていたからなのである。

エスタは最後にウッドコートと結ばれ、ジャーンダイスが用意したヨークシャーの「荒涼館」の主婦になる。ヨークシャーでのウッドコートの仕事も貧者が対象の医療行為で、華々しい成功は見込めないが、理想的な慈善家である二人にとってそれは大した問題ではない。ウッドコートは以前と変わらず熱心に貧しい患者たちの世話をし、エスタは夫に対する感謝の声を耳にするだけで満足している。エスタもウッドコートも与えられた環境に満足し、慈善をそこから抜け出す手段にはしていない点で、野心的な「悪い」慈善家たちとは決定的に異なる。それはまた、二人の慈善行為はあくまで個人的なもので、その成果も個人的な範囲に限られるということでもある。しかしながら、声高に博愛主義を唱える慈善家たちの仕事の実を結ばないなか、地道で人目を引かない二人の慈善は確実に受け手に受け入れられているのである。

IV. 結論

『荒涼館』は複数のプロットが複雑に絡み合った重層的な作品だが、こうしてみると、ジャーンダイスの“charity”によって救われたエスタが“charitable”な女性に成長し、同じく“charitable”なアラン・ウッドコートと結ばれる、というプロットも浮かび上がってくる。エスタをめぐるプロットは、理想的な慈善を追求するプロットにもなっているのである。

第8章に、ジャーンダイスの慈善に対する考えが明らかになるところがある。

[H]e had remarked that there were two classes of charitable people; one, the people who did a little and made a great deal of noise; the other, the people who did a great deal and made no noise at all. (100)

これはディケンズ自身の意見でもあるだろう。『荒涼館』では、自らのミッションについて雄弁に語る慈善家ほど、大した成果を上げられないからである。彼らの活動は思いつきだけの無謀なものであったり、見せかけだけのものであったり、社会的上昇を目指すための手段にすぎない。一方、ジャーンダイスの言う「静かに多くのことを成し遂げる人々」(the people who did a great deal and made no noise at all)の慈善は、『荒涼館』においては個人的な慈善ということになる。ジャーンダイス、ウッドコート、エスタは、みな自分のできる範囲で

個人的な善意から周囲の人を助けている。まさに“Charity begins at home”を実践しているわけだが、考えてみればこれは奇妙なことでもある。ディケンズは自分が慈善活動に関わった経験から、個人の善意だけでは、たとえば都市の貧困や衛生の問題などは解決できないことがわかっていたはずである。にもかかわらず、慈善の問題を大きく取り上げた小説『荒涼館』では、組織的な慈善活動については問題ばかりが目立ち、個人的な活動に軍配が上がっている。現実には慈善活動は組織化・専門化の道をたどっており、1850～60年代に慈善に携わる女性の教育の必要性が問題になったのもそのためであった。⁸『荒涼館』の理想の慈善は、時代に逆行しているとさえ言えるかもしれない。

ここには、全知の語りとパーソナルなエスタの語りを使い分けて、社会の制度や組織と個人を対照した『荒涼館』という小説の構造が関係していると思われる。全知の語り手が最後にチェズニー・ウォルドの荒廃を語るのに対し、エスタの語り手は新しい「荒涼館」での幸せな生活で締め括られるように、この小説では希望は個人に託される。慈善についても同様で、慈善活動が組織化されていく時代だからこそ、原点に戻ってその基となるべき個人の慈愛の精神を強調しているのである。

『荒涼館』は当時盛んに行われていた慈善活動を扱っており、作者ディケンズは自分でも慈善活動に深く関わってその実態をよく知る立場にいた。しかしながら、小説世界は必ずしも現実とは一致していない。『荒涼館』における慈善は、当時の事情を踏まえながらも、現実をそのまま反映しているわけではない。ディケンズが『荒涼館』で試みた理想の慈善の追求は、慈善活動が組織化・専門化してゆく動きのなかで立ち止まり、もう一度個人の善意のレベルに戻って慈善の本質を考え直すことだったのである。

註

* 本稿は、ディケンズ・フェロウシップ日本支部春季大会（2009年6月20日、於中京大学）における口頭発表に加筆・修正したものである。

1. 「慈善」を表すことばとしては“charity”と“philanthropy”がよく用いられるが、“charity”には宗教的含意があるのに対し、“philanthropy”はより広い「博愛」の意味で使われる。ただし、18, 19世紀にはほぼ同義に使われていた(Elliott 12; 金澤3)。『荒涼館』においては、“philanthropy”あるいは“philanthropist”は本稿で言う「悪い」慈善と慈善家についてのみ用いられている。それに対して“charity”とその形容詞“charitable”は、「悪い」慈善について皮肉めて用いられる個所もあるが、多くは本来の「キリスト教徒の美德としての慈愛」の意味で用いられている。

2. 女性の公共圏への参入を可能にしたものとして慈善活動に注目した代表的な研究が、次節で言及するプロハスカのもの。
3. チザムをジェリビー夫人のモデルと指摘したのはバットとティロットソン (Butt and Tillotson 194)。その後シャトー (Shatto) をはじめ多くの版の『荒涼館』の註で指摘されている。
4. “A Bundle of Emigrants’ Letters”, *Household Words* (30 March 1850).
5. *The Examiner*, 19 Aug. 1848. Rpt. in *Miscellaneous Papers*, vol. 1, 133–34.
6. ジェリビー夫人のプロジェクトがニジュール遠征を連想させると述べたのはバットとティロットソン (Butt and Tillotson 194)。この説も、シャトーをはじめ多くの『荒涼館』の注釈で踏襲されている。
7. エスタがウッドコートとともに慈善活動をする場合、ジェイムソンが推奨した専門職の男性のアドヴァイスを受けた女性の慈善活動になっている点も興味深い。
8. もともと慈善 (charity) は、地方のパターナリステックな主従関係において典型的に見られた個人的なものだったが、18世紀後半になるとより広い対象に向けた、組織化された慈善 (philanthropy) が生まれた。ドリス・エリオットはこれを踏まえうえでさらに、19世紀半ば以降慈善が次第に専門化してゆく過程で、組織的な慈善の主導権を専門職の男性に奪われて素人の女性たちが閉め出されていた、とジョージ・エリオット (George Eliot) の『ミドルマーチ』 (*Middlemarch*; 1871–72) を取り上げて論じている。

参考文献

- Ayres, Brenda. *Dissenting Women in Dickens’ Novels: The Subversion of Domestic Ideology*. Westport: Greenwood, 1998.
- Butt, John, and Kathleen Tillotson. *Dickens at Work*. London: Methuen, 1957.
- Dickens, Charles. *Bleak House*. 1852–53. The Oxford Illustrated Dickens. Oxford: Oxford UP, 1987.
- . *The Letters of Charles Dickens*. 12 vols. Ed. Madeline House, Graham Storey and Kathleen Tillotson. Oxford: Clarendon Press, 1965–2002.
- . *Miscellaneous Papers*. 2 vols. Ed. P. J. M. Scott. New York: Kraus, 1983.
- Dyson, A. E., ed. *Dickens: Bleak House*. Casebook Series. London: Macmillan, 1969.
- Elliott, Dorice Williams. *The Angel out of the House: Philanthropy and Gender in Nineteenth-Century England*. Charlottesville: UP of Virginia, 2002.
- Household Words*.
- Jameson, Mrs. [Anna]. *Sisters of Charity, Catholic and Protestant, and The Communion of Labor*. 2nd ed. Boston: Ticknor, 1857.
- Mill, John Stuart. *The Subjection of Women*. 1869. Ed. John Gray. *On Liberty and Other Essays*. Oxford: Oxford UP, 1998.
- Moore, Grace. *Dickens and Empire: Discourses of Class, Race and Colonialism in the Works*

- of Charles Dickens*. Aldershot: Ashgate, 2004.
- Pope, Norris. *Dickens and Charity*. London: Macmillan, 1978.
- Prochaska, F. K. *Women and Philanthropy in Nineteenth-Century England*. Oxford: Oxford UP, 1980.
- Shatto, Susan. *The Companion to Bleak House*. London: Unwin, 1988.
- Schlicke, Paul. *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- 金澤周作, 『チャリティとイギリス近代』, 京都大学学術出版会, 2008年.